

## 閉鎖と鼻音

肥爪 周二

### 1 はじめに

筆者が以前に提出した、連濁の起源についての仮説（肥爪二〇〇二、二〇〇三、二〇〇四）の、清濁分化の音声的仕組の部分に対し、高山倫明氏からご批判をいただいた（高山二〇〇六）。つまりは、筆者の仮説そのものについての批判ということになる。連濁の起源という、立証も反証も困難な事柄についての仮説であるだけに、個人的に感想をいただいた方はあったものの、純粋に学問的な形での批判はこれまでになく、高山氏による具体性のある疑問の提起は、筆者としても、たいへんありがたいものであった。

本来なら、高山氏の批判自体が十分に検証可能な形で提示されているのであるから、その批判が適切なものであるかどうかは、読者の判断に委ねればよいのであろう。しかし、高山氏の批判は、連濁の問題と直接には関わらない、「四つ仮名」の合流過程についての議論の延長でなされたもの

であり、かつ、多くの研究者の学説が紹介・批判された一連の流れの末端で言及されたものであるため、筆者の考え方が、狙上に上がっている多くの学説と、どのような点が一致し、どのような点が無関係であるのかが不分明になっており、筆者の仮説自体が、拙稿を直接は参照しない読者に、誤って理解されるおそれを感じた。

高山氏は、いくつかの学説を紹介・批判した後、筆者の仮説を紹介し、「前鼻音と強閉鎖が相反する関係にあることは、繰り返すまでもなからう」と簡単にコメントをする。高山氏が論考の過程で挙げている音声学的知見の大部分は、筆者の立場からしても、ごく妥当なものであり、論文全体の主旨である、「四つ仮名」の合流過程についての見解も概ね納得の行くものである。つまり、高山氏の挙げている多くの事実は、筆者の連濁の起源についての仮説とは、特に矛盾するものではないのである。そのため、「前鼻音と強閉鎖が相反する関係にあることは、繰り返すまでもなからう」

というような、そこまで述べられてきた事柄が、筆者の仮説に対する反証になっているかのような表現には、ただ戸惑うよりしかなかった。そもそも、古代語の濁子音の音価として推定されている「前鼻音化破裂音 *prenasalized stop*」とは、閉鎖の継続中に呼気の流れが鼻腔から口腔へと切り替わる子音の一種であり、たとえ前接する母音が極端に鼻音化されたとしても、それは付随的な現象に過ぎないのであるから、「前鼻音と強閉鎖が相反する関係にある」というまとめ方が行き過ぎたものであることは明白であろう。

この機会に、筆者の見解と高山氏の見解の一致点・相違点を整理し、何が議論の焦点になっているのかを第三者にも分かるように提示するのが、結果的に日本語音韻史研究の発展に寄与するものと考え、誌面をお借りすることにした。すでに拙稿で述べたことの繰り返しになる部分も多いがお許しいただきたい。

## 2 連濁の起源についての拙案

まず、連濁の起源についての筆者の仮説を略説しておく。連濁の起源についての従来の諸説の、どのような点に筆者が違和感を覚えるかは、本稿の後半で述べることとする。

しばしば想像されているように、かつての日本語に清

濁の音韻論的対立が存在しない、すなわち阻害音のグループに声の有無の対立が存在しなかったとすると、諸言語の例から考えて、阻害音は、語頭で無声音、母音間では有声音という異音分布をなしていたと考えても不自然ではない（以下の挙例では、上代特殊仮名遣の別は省略する）。

川 /kapa/ [kaba]

人 /piŋo/ [pido]

この有声化によって、語としてのまとまりが音声的に標示されることになる。複合語や派生語、およびそれに準じるもの（以下、単に複合語と呼ぶ）の場合、同様の有声化によって結合標示がなされる。

小川 /wokapa/ [wogaba]

里人 /satopiŋo/ [sado<sup>m</sup>bido]

この段階では、まだ連濁形とは言えない。このような状態において、語構成を明示するために、内部境界の子音が強調（延長）された場合、この閉鎖延長と、結合標示のための声帯振動の維持を両立させるための一つの方法として、鼻腔に呼気を抜く「庄抜き」が起こり得た。

小川 /wo-kapa/ [wo<sup>g</sup>gaba]

里人 /sato-piŋo/ [sado<sup>m</sup>bido]

この状態は、現代北東北方言の音形に近似するもので

ある。

以上のような経緯で、複合語の内部境界に「濁音」が発達し、これこそが連濁現象の起源であると同時に、清濁の別の起源であったと推定する。ただし、この段階では、「濁音」は複合語の内部境界のみに立つ異音にとどまるものであり、清音と音韻論的に対立して、語の意味の区別に関与するものではなかった。

引き続き、「なにとVなど」「はにしVはじ」のような「連声濁現象」が起こり、「濁音」は複合語の内部境界以外にも立つようになり、清濁の対立の音韻化 phonologization が起こる。この時点では、清濁の対立は「非鼻音／鼻音」の対立であった。さらに時代が下り、語頭濁音の発達、撥音の発達にともない、清濁の対立は「無声／有声」の対立へと転換してゆくことになる（再音韻化 rephonologization）。

以上のように、濁音の起源を、複合語の内部境界の強調に求めるならば、濁音が持つている「語頭に立たない」（ストレス）アクセントに似た性質を持つ」等の特徴を必然的なものとして説明できるし、「清音を強めたものが濁音である」という、日本語話者の素朴な直観にも合致する。また、連濁形よりも結合度が高い非連濁形が存在する

(一)ことも、無理なく説明できるようになる。

### 3 高山氏に答える

第一節で述べたように、筆者の立場からすると、高山氏の論考において挙げられた事実のほとんどは、筆者の仮説と矛盾しないものである。当然のことながら、高山氏としても、筆者の仮説に対する反証となると考えている事柄と、論考の流れの中で筆者の仮説とは無関係に挙げた事柄とがあるであろう。しかし、採り上げられている多くの事実のいずれが、筆者の仮説に対する反証となると考えられているのか、筆者にとつては判断が難しいため、高山氏の論考の中で、「前鼻音と強閉鎖が相反する関係にある」という見解と関係のありそうな事柄を一通り抜き出し、それぞれについて、筆者の見解を述べることにする。

高山氏の提示する事実は、概ね、以下の四点にまとめることができよう（筆者の要約による）。

① 撥音のあとのザ行子音は、常に破擦音で実現するわけではなく、しばしば摩擦音で現れる。鼻音のあとに摩擦音が立つ例は、他の言語にも普通に存在する。つまり、鼻音が後続音に閉鎖を要求するということはい。

② 口腔内に閉鎖があれば、ただちに肺臓からの呼気が

鼻腔に流れるというわけではない。

③ 破裂音（摩擦音）の実現のためには、高い口腔内圧が必要であり、そのためには鼻腔への呼吸を遮断する必要があるのである。つまり、破裂と鼻音とは相反する関係にある。

④ 中央語をはじめとする多くの方言や、日本語以外の諸言語において、破裂音の《無声／有声》がごく普通に対立しており、その対立を安定させるため（有声閉鎖音の有声性を維持するために）に殊更に前鼻音が発達する必然性は乏しい。

### 3・1 ①について

高山氏の論考は、四つ仮名の合流過程に、前鼻音がどのように関与したのか、この前鼻音が合流を抑制していたのか（前鼻音の消失により合流が進行したのか）、それとも、前鼻音の存在が合流を推進する方向に作用したのかという、相反する先行学説の紹介から出発している。そして、この両説とともに、前鼻音の存在が子音本体の閉鎖を維持する（または閉鎖を生じさせる）方向に働く点では一致している点に疑問を提起する。そして、多くの音声学的事実を例示することにより、鼻音が後続音に閉鎖性を要求する（鼻音の存在が、後続の摩擦音を破裂音に変化させた

り、後続の破裂音がゆるんで摩擦音化するのを阻止したりする）という認識には、一般音声学的な根拠が存在しないこと述べる。

この結論はごく妥当なものであって、むしろ音声学の常識に沿ったものと言えるであろう。筆者もまったく異論はない。筆者の仮説において、前鼻音の発達のきっかけに閉鎖を想定してはいるものの、いったん定着した鼻音を維持するためには、もはや閉鎖が必須ではないのは当然のことである。肥爪（二〇〇三）でも、「濁音の示差的特徴として前鼻音が定着した後は、閉鎖の継続時間が短縮されたり、閉鎖そのものが緩んだりしても構わないのは言うまでもない」と明確に述べたつもりであった。

ただし、撥音に後続するザ行子音が、摩擦音で現れうることは事実であっても、破裂音で現れるのが一般的であることまでは過剰に否定する必要はないであろう。これは、母音間のガ行子音・バ行子音が、しばしば摩擦音「ㄱ」「ㄷ」で現れるにもかかわらず、撥音に後続する場合には、破裂音で現れるのが標準的であるのと、まったく並行する事実である。そこには、やはり何らかの音声学的な理由が存在するに違いない。

あくまで、閉鎖の有無が音韻の弁別に関与しないという条件下においての話であるが、調音に際して、同じ構えを長く維持する必要がある場合は、舌・唇の微妙なコントロ

ールの継続が必要となる摩擦音よりも、完全に閉鎖をしてしまう破裂音（破擦音）の方が、調音が容易であるし、安定もする、という程度のことでは言えるのではないだろうか。

つまり、鼻音そのものの関与ではなく、せばめの継続時間の問題として、この問題を捉えることも可能なのではないだろうか（促音の後に立つハ行子音が破裂音「p」に定着しているのも、大元をたどれば、同様の理由によるものである）。もちろん、鼻音の実現に際して、閉鎖の有無が任意であるならば、口腔に呼吸が流出し続けるのは無駄でしかないから、口腔側では閉鎖を形成して、鼻腔にのみ安定的に呼吸を送る方が効率的であるということも言えるであろう。そして、鼻音が閉鎖を伴っている場合は、後続音も破裂音（破擦音）となるのが自然である。

古代語の濁音の音価についての議論一般において、濁音の前の鼻音要素は、慣例的に「鼻母音」と表現されることがあるため、議論の焦点が曖昧になってしまう事が多いように思われる。言うまでもなく、濁音の前の鼻音要素は、音声学的には鼻母音と観察することが可能であっても、音韻論的には、前接する母音に所属するものではなく、濁子音の側に所属する要素である（前鼻音に関する議論は、しばしば音声レベルの問題と音韻レベルの問題が渾然と語られてしまう傾向があるようである）。この前鼻音は、音声学的に見た場合、閉鎖を伴わない純粋な「鼻母音」であるの

か、閉鎖を伴う子音的要素を含んだものであるのか、直接観察することが可能な対象であってさえも判断としないことがある。口腔側の調音運動と、鼻腔に呼吸を抜くための口蓋帆の動きは独立しており、鼻音性は、音声的には前接する母音から閉鎖の完成にかけて、広い範囲に被さりうるものである。「前鼻音」の閉鎖の有無を厳密に規定することは、あまり生産的なことではないであろう。ただ、《鼻母音》の後続音は破裂音である方が自然である」と表現してしまうと、さすがに奇妙であるので、亀井（一九五〇）の「鼻母音が存在するかぎり、デヅの摩擦音化が起こりにくいであろう」という見解に対し、高山氏が抵抗を感じるのももつともなことである。

### 3・2 ②について

「口腔内に閉鎖があれば、ただちに肺臓からの呼吸が鼻腔に流れるというわけではない」という指摘も、筆者にとつて当然のことである。筆者の仮説では有声破裂音の強弱（長短）の区別を明確にするために、強調された方の有声破裂音に前鼻音が発達したと説明したのであって、「前鼻音が伴わない有声破裂音」の存在が前提となっているのである。そして、強調された有声破裂音においても、自動的に前鼻音が発達するというようには考えていない。「延長さ

れた閉鎖部の)閉鎖を保ったまま、結合標示のための声帯振動を維持するには以下の方法が考えられる。(略)①側面に呼気を抜く。②鼻腔に呼気を抜く(肥爪二〇〇三)、「結合標示のための声帯振動の維持と、内部境界標示のための閉鎖延長を、両立させるための一つの方法として、鼻腔に呼気を抜く(《庄ぬき》が起こる(肥爪二〇〇四)と述べたように、声帯振動と強閉鎖を両立させるための多様な手段(2)のうち、結果的に鼻腔に呼気を抜く方法が選択されたと考えているだけであつて、それが自然発生的・必然的な現象であると述べたつもりはないのである。その多様な選択肢の中に、鼻腔へ呼気を抜く「庄ぬき」が存在しうることについては、第四節で述べる。

高山氏はブレーラウトによつて、声帯振動と閉鎖は両立可能であるとお考えのようである。確かに、閉鎖の継続時間が短かければ(通常の長さならば)、声帯振動が完全に停止する前に閉鎖が開放され、閉鎖と声帯振動は両立されるのであるけれども、その場合でさえ、閉鎖の後半にかけて声帯振動が弱化する事については、国立国語研究所(一九九〇)にも、以下のような指摘がある。

(母音間の有声破裂音の発音に関して)母音間の有声のさまたげ音のこのくろい部分(肥爪注・ソナグラム上に、声帯の振動として記録される buzz bar)が子音

の閉鎖区間の前半の部分によりおおくおこり、後半のでわたりにかいかい部分でおこらない傾向をしめしていることである。このことはソナグラム上でもよくしられた事実であつて、声門下の気圧と声道内の気圧とが閉鎖の持続区間に均衡してしまふ結果、より正確には、声帯を振動させうるにたるほどの声門下の気圧と声道内の気圧の差が欠如してしまふ結果、声帯の振動がやむためであるとかんがえられる。

筆者の仮説で問題としているのは、この「有声破裂音」について、十分知覚可能な程度に、閉鎖の強弱(長短)の差を付けようとする欲求が生じた場合にはどうなるかということである。そこでは、有声破裂音の閉鎖を強調(延長)した場合に、声帯の振動が停止することになると主張しているのであるが、高山氏も、有声破裂音の閉鎖の継続時間が「よほど不自然に長く」延長すれば声帯振動が停止することは認めているのである。どの程度が「よほど不自然」な長さなのかは主観的な問題であるけれども、少なくとも、「すつこく」「ひつで」「やっべー」のような「促音+濁音」の発音において、かなり早口で発音しても促音部分で一旦声帯振動が停止することは、誰にでも容易に観察できる事実であろう。

あるいは、喉頭を下げた声門下と声道内の気圧差を調整

するなど、何らかのコントロールを加えれば、ある程度長く有声破裂音を延長することが可能ではあるので、「やっべー」などは「[jaβe:]」のような発音もできなくはない（あくまでコントロールを加える必要があるのであって、自動的に起こるということはない）。しかし、延長中は、その音（この場合は「[β:]」）と識別できないようなくもった音が鳴るだけであるから、ただちに聞き手によって、「[jambe:]」のような発音に置き換えられてしまいうのである。川上（一九九〇）の前鼻音の起源についての以下のような説明（高山論文でも同じ箇所が引用されている）も、これと同様の発音転化を述べようとしているのではないだろうか。

濁子音 [g, b, d] を清子音 [k, t, p] からいやが上にも明確に言い分けようとして、それら有声破裂音の閉鎖期間中に力をこめてしぼり出した声、声と言つても口中に閉じこめられた、つぶやくような、うめくような陰気な音響、いわゆるブレーラウトを、さらに相手にも聞こえやすく自分にも発音しやすく翻案したのが、それらの鼻子音であった。

### 3・3 ③ について

「破裂の実現には口腔内圧の上昇が必要であり、鼻腔に

呼吸を抜くことと、口腔内圧の上昇とは相反する関係にある（肥爪要約）」というのが、おそらく、筆者の仮説に対する高山氏の批判の、最も重要なポイントなのであろう。高山氏は以下のように述べる。

とくに高口腔内圧子音 (pressure consonant) とも呼ばれる破裂音・摩擦音を発音するためには無声で 25mmH<sub>2</sub>O、有声で 7mmH<sub>2</sub>O 程度の口腔内圧の上昇が必要だという。これだけの口腔内圧を保つには、口蓋帆を挙上して咽頭後壁に密着させ、鼻腔と口腔を遮断する必要がある。（一六四頁）

前鼻音によって声帯振動が安定することはあつても、それがあるかぎりは口腔内圧の高まりはないのだから、破裂の実現が安定することはありえない。（一六六頁）

筆者の見解を述べる前に、右に引用されている数値についてコメントしておく。この数値は、直接的には、竹内・福田（二〇〇二）によるものと思われる。しかし、一般に、調音の際の口腔内圧は、無声音の方が有声音よりも高く、阻害音の方がその他の子音よりも高いとされている。つまり、有声音と無声音とでは大きな差があるけれども、破裂音（摩擦音）と摩擦音とでは差はほとんどないはずである（肺臓からの呼吸の流量は、また別の問題）。高山氏も参考

文献に挙げる荏安(二〇〇一)は、破裂音・摩擦音を「圧力子音 (pressure consonant)」としてゐるし、別の概説書

(Benthal & Bankson 二〇〇一)は、無声の破裂音(破裂音)・摩擦音のみを、「高口腔内圧子音」と説明している。

鼻音の後が破裂音か摩擦音かという議論をしている高山論文において、右のように摩擦音に言及せずに破裂音・摩擦音についての数値のみを引用すると、読者の誤解を招くことになるのではないだろうか。ただ、有声破裂音の発音にも、無声音に比べるとかなり小さいとはいえ、口腔内圧の上昇が必要で、鼻腔に呼気を抜くことは両立しにくいというのは事実である。

しかしながら、この問題を考察するためには、「閉鎖の維持」の問題と「破裂(開放)の実現」の問題とを分離する必要があると考える。確かに、「破裂の実現」のためには、口蓋帆を挙げた状態で口腔内圧を高めるのが一般的であり、そのことに異論はないが、口腔内圧の上昇は、閉鎖の後半(極端に言えば開放の直前)に起これば十分である。一方、声帯振動と同時に「閉鎖の維持」がなされている場合は、口腔内圧が上昇しすぎると、そのままでは声帯の振動が停止してしまうのである。そして、前鼻音化子音こそが、(長めに維持される)閉鎖期間中における声帯振動の継続と、開放のための口腔内圧の上昇とを同時に行える音形の一つであるということになる。

### 3・4 ④について

高山氏は、「前鼻音の起源」についての先学の所説を紹介・批判する中で、これを「有声性の強化」「清濁弁別の明確化」として説明する路線を批判し、「中央語をはじめとする多くの方言や、日本語以外の諸言語において、破裂音の《無声/有声》はごく普通に対立しており、その対立を安定させるため(有声破裂音の有声性を維持するために)に殊更に前鼻音が発達する必然性は乏しい」という主旨の説明をする。この見解に対しては、まったく異論はない。筆者の仮説は、すでに繰り返し述べたように、有声破裂音の範囲内での閉鎖の強弱(長短)を弁別するという議論なのであるから、右の批判とはまったく接するところがないのである。

### 4 前鼻音の起源について

高山氏は、前節で引用した事柄に加え、[nda] [ɲa]のような発音の前鼻音要素が、音声学的に「わたり」とは言えないということから、前鼻音は別の単音かそれに付随するもの(鼻母音の一部)であると主張し、前鼻音化破裂音が、通常の有声破裂音(摩擦音)が変化したものと解し



がたいという立場を取る。

声帯振動と閉鎖を両立させるために、鼻腔に呼吸を抜くという調音動作は、たしかに自然発生する「わたり」のようなものではないというのは事実であり、筆者の仮説でも、「入りわたり鼻音」という伝統的な呼称を避けている。ただ、閉鎖と声帯振動を両立させるために鼻腔に呼吸を抜く「圧ぬき」が起こるといふ説明は、高山氏が言及している、高山知明（一九九三）・肥爪（二〇〇三）以外にも、ごく普通に採用されている説明であって、決して異端の解釈ではないといふことは明言しておきたい。国立国語研究所（一九九〇）にも、先に引用した箇所を引き続いて、語頭の有声破裂音についての説明の延長で、以下のように述べた箇所がある。

もし、この語頭のさまざまげ音の閉鎖区間中に声帯を振動させたければ、呼吸筋の調整によって声門下の気圧をすこしあげればよい。そうすれば、声帯はふたたび声道内気圧と声門下の気圧が均衡するまでのみじかい時間だけ振動する。あるいはこのばあい、ある一定の気圧差では振動しえない状態におかれている緊張した声帯筋の緊張をいくぶんゆるめることによっても、声帯は振動することがあるし、また、軟口蓋と咽頭後壁との閉鎖をわずかにゆるめて、声道内の気圧をいく

らか「圧ぬき」することによっても声帯は振動する。（この有声の破裂音の「圧ぬき」のためにおこる鼻音化現象は、諸言語、そして日本語の諸方言の有声破裂音におおくの例をみる。また、鼻音と有声破裂音が交替するような型の音韻変化はこの「圧ぬき」とかわりあう現象である。）

また、Nasukawa（二〇〇五）で提出されている、いくつかの言語において、（母音間の）長く延ばされた破裂音（long-lead plosives）と前鼻音化破裂音とが、異音関係にある（日本語の場合は、それが歴史的変化として現れる）とする解も、同様の発想によるものであろう<sup>3)</sup>。

ここで、日本語から離れ、他言語における類似の現象（本来鼻音が存在しないところに鼻音が発達する現象）として、幼児の英語の発音、ブランクリット語・ヒンディー語の事例を挙げることにする。

#### 4・1 幼児の英語の発音

幼児の英語の発音において、単語末の有声破裂音  $ʔ$ 、 $ɓ$ 、 $ɓ$  の発音の獲得が、無声破裂音  $ʔ$ 、 $ɓ$ 、 $ɓ$ 、鼻音  $ɓ$ 、 $ɓ$  に遅れることは、しばしば指摘されることである。これは、母音（有声音）に挟まれないという環境において、十

分に弁別可能な形で閉鎖と声帯振動を両立することが、生理的に難度の高いものであることの、一つの表れであると考えられる。そして、単語末の有声破裂音を獲得する以前には、以下のような発音が現れることが指摘されている。

① 脱落

bed [be]

② 無声化

bed [bet]

③ 母音の添加

bed [bedə]

④ 鼻音化

bed [bem] ([n]より[m]が一般的であるという)

加えて、このような発音の次の段階、つまり、単語末の無声破裂音・鼻音を獲得してはいるが、有声破裂音は獲得していない段階の発音として、nasal strategyと呼ばれる段階があることが報告されている(⑤はClark & Bowerman 一九八六、⑥はFey & Gandour 一九八二による)。

⑤ 前鼻音化 prenasalized

dog [doŋk] bad [bɑŋk]

⑥ 後鼻音化 postnasalized

dog [doŋŋ] bad [bɑŋŋ]

⑤と⑥は、閉鎖の前半で鼻腔解放を行うか、後半で鼻腔解放を行うかの違いであり(④の鼻音化は、閉鎖の全体で鼻腔解放を行っていることになる)、いずれも口腔側での閉鎖と声帯振動との両立が困難であるのを、鼻音によって有声性の代用をする、または鼻腔に呼吸を抜くことにより声帯振動と閉鎖を両立する、という方法が選ばれた結果として実現する発音と解される。特に⑥のような鼻腔開放が、語末の有声破裂音よりも発音が容易であるというのは、日本語話者にとっては意外な事実である。

こうした幼児の発音は、幼児の臨時的な発音に止まらずに、ある程度普遍化し、社会的に定着する、すなわち歴史的な変化を引き起こす可能性もあるのだが、その言語の既存の音連続と干渉する場合には、当然、歴史的変化には発展しにくいということになる。英語の場合は、⑤⑥のような音声的変異が歴史的変化に発展する可能性は低いと判断される。「前鼻音化子音」一般について言うならば、閉音節を有し、音節末に鼻音が立つことが許容される言語の場合、「[d]」「[b]」のような発音は、幼児の臨時的な発音としては現れなくても、それが社会的に定着する可能性は、きわめて低いということになる(語頭の前鼻音化子音に関しては、また別問題)。「日本語の濁子音が有していた前鼻音

は上代語にまで遡る、つまり、撥音の音韻としての発達に先行して濁子音は前鼻音化していた」とする、現在の国語学における主流の考え方は、この点でも妥当なものであると考えられるのである。

#### 4・2 プラークリット語・ヒンディー語の例

Grierson (一九二二) では 'spontaneous nasalization' とし、プラークリットの破裂音(破擦音)の重複が、近代語において、「鼻音+破裂音」または「鼻母音+破裂音」として対応することがあることが指摘されている(近代語はヒンディー語の例のみを引用する)。

Sanskrit	Prakrit	Hindi
karkarā-	kakkara-	kaṅkar
maksika	makkhīa	mākhiṛ
pakṣa-	pakkha-	paṅkha
akṣi-	akkhi-	ākhi
mudya-	mugga-	mūg
√ mārg-	√ magga-	√ māg-, māṅ-
uccaka-	ucca-	ūca
satya-	sacca-	saṅ, saṅc

chardati	chaddai	chare <sup>R</sup>	(√ chardē)
nīdra	niddā	nīd, nīd <sup>R</sup>	
sarpa-	sappa-	sāp, sāp <sup>R</sup>	

挙げられているプラークリットの例は、いずれも、該当箇所が破裂音(破擦音)の重複であり、音声的には閉鎖の継続として実現するものである(日本語の促音のように発音され、無声音・有声音ともに例がある)。

続いて、同様の事例として、サンスクリットとの対応規則からは、プラークリットで子音重複が期待されるにもかかわらず、「鼻音+子音」で現れている例(Skt. vakra- に対し、Pkt. vaka- ではなく vanka-、Skt. darsana- に対し、Pkt. dassana- ではなく darsana- 等々) また、プラークリットにおいて「子音重複と「鼻音+子音」の両形が存在する例(alukkhai, aluṅkhai, aluṅghai' okkhanai, oṅghanai 等々)、Mahārtha-māṅgari」と題する偈文において、プラークリットの子音重複が「anusvara(空点)+単一子音」で対応する例(Skt. āma-, Pkt. appa- に対し、anpa-、Skt. karā, Pkt. kattāro に対し、kaṅtārō 等々)を挙げている。これらに關しては、一部に無声摩擦音の重複(延長)に相当するものも含まれているが、多くは破裂音(破擦音)の閉鎖延長が関与するものである。

諸言語の歴史に見られる鼻音発達の音声的環境は、実に多様であり、容易には共通の条件を想定しにくい。右のプラークリット語・ヒンディー語の事例に関しては、[s] [h] [x] などの無声摩擦音の直前の母音の音色は、鼻母音に聞き為されやすいという実験結果を傍証に、これらの鼻音発達を、呼気流量の問題として説明することもある (Ohala 一九八二・Ohala & Ohala 一九九三) が、それでは有声破裂音のケースが説明しにくい。右の事例の共通点は「長子音の前半部が鼻音に置き換えられる (促音が撥音に交替すると喩えられようか)」ということであり、これが一種の異化現象であるとする、そもそも生理的な観点からの説明はできないのかもしれない。多数派である破裂音の事例を重視し、閉鎖の延長による口腔内圧の過度の上昇を避けて、発話をなだらかにするために鼻腔に呼気を抜いた発音が、長子音一般に波及したという説明が可能かもしれないが、なお考える必要がありそうである。

筆者の仮説においては、有声破裂音の延長により前鼻音が発達するという解釈を採用しているが、右のプラークリット語・ヒンディー語の事例は、無声破裂音の延長もまた、前鼻音が発達する契機になりうることを示している。筆者は、先に引用した国立国語研究所 (一九九〇) の記述や、現在の方言に実在する形と結びつけやすいところから、古代語の清子音が母音間で有声的であったする早田 (一九七

七) 等の見通しを援用したのであるけれども、この有声化説自体には、それほど拘りはないので、場合によっては修正しても構わない。早田説に従う場合でも、清子音の有声化は任意であった (自由異音であった) と考える方が、より自然であろうから、無声破裂音の延長も前鼻音発達の契機となりえたと考える方が、仮説としての具合がよい。ただし、濁音が「鼻音+無声子音」で実現する方言が見えたらない以上、仮説としての優先順位は、有声破裂音延長説の方が高いかもしれない。

##### 5 前鼻音の起源についてのまとめ

「鼻腔は暖炉の煙突のように口腔と常時繋がっているわけではなく」「肺臓気流と音声器官はパスカルの原理を応用した油圧装置のようなものではない」のは確かであつて、前鼻音は強閉鎖によって自動的に生じるものではない。しかし、有声破裂音を有声音のまま十分に延長することが困難であるのは生理的な事実であり、また、第四節で例示した、幼児の英語の発音やプラークリット語・ヒンディー語の事例を考慮すれば、有声破裂音が前鼻音化破裂音に変化することなどあり得ないと断言するには、もう少し慎重であるべきであろう。そもそも、あるタイプの音変化が自然か不自然かということまでは言い得ても、それが絶対に

起こらないということなど、簡単に言えることではない。たとえ、どんなにありそうにない変化であっても、いろいろな言語の歴史に目配りをすれば、たいてい似た例（他人の空気に過ぎないものも含めて）が見つかるものであるし、見つからない場合にも、単に探したりないのが原因である可能性を捨てきれないであろう。また、二段階以上の変化過程を組み合わせれば、実に多様な「変化」が説明可能になり、それらのうちのいくらかは、実際の言語史において起こっているであろう。

幼児の英語の発音の事例が示しているように、閉鎖と声帯の振動を両立させる手段はさまざまであり、筆者の仮説も、その手段が多様であるという前提で考察を進めている。もし、閉鎖と声帯の振動を両立させることを意図した結果として現れる音声変異が、自然かつ自動的に起こるのであるならば、幼児の英語の発音が、これほど多様な現れ方をするとすることは考えにくいであろう。bet [bet]の [e] のような添加母音も、閉鎖と声帯の振動を両立させるために必然的に発生するということはありえないのである。

睡眠時を含め、人間の自然な呼吸は鼻腔を通しても行われるのであるから、人間の呼吸の流れは、鼻腔にも抜けるのがニュートラルな状態であるとさえ言える。言語音としては、必要に応じて音量を上げやすい口母音が中心的な役割を果たし、鼻腔に呼吸が抜けるのが有標な調音であるに

しても、何らかのきっかけさえあれば、人間本来の自然な呼吸の流れが滲み出し、その際に声帯が振動していれば鼻腔で共鳴が起こり、本来は存在しなかった鼻音が発達するということもあるのではないだろうか。「いやーん」「うっそーん」「そうだよーん」のような鼻音発達は、文末における口蓋帆のゆるみに由来するものであろうし、また、（現代日本語の）母音「イ」は、しばしば鼻母音的に発音されるものが指摘されているが、それも、音韻の区別に干渉しない範囲でならば、発話中、意外に気付かないうちに、鼻腔に呼吸が抜けることを示す事実なのではないだろうか。

音韻音声の変異・変化は、生理的な必然性によつてのみ生じるものではない。幼児の発音に見られるような、多様な可能性の中から、「調音の容易さ」等の生理的な理由の他、「伝達の効率」「その言語の既存の音韻体系との兼ね合い」など、さまざまな要素のせめぎ合いの結果として、極端に言うならば「偶然」の選択として、ある一つの形が採用されると考えるべきであろう。

#### 6 高山氏に答える（補遺）

高山氏は、論文の結びにおいて、拙稿の文章を引用しつつ、「声帯振動の有無や氣息の有無、口母音と鼻母音の対立等々、世界の諸言語には様々な音韻論的な対立項があるな

かで、『このような経緯で清濁の対立が「鼻音／非鼻音」という、世界の諸言語に類例を指摘しがい対立として出発した（肥爪二〇〇三）』というようなことは言いにくいのではないか」と批判された。この批判の意味するところは、筆者にはよく理解できないものであった。

右の引用の筆者の文章には不適切・不十分な表現が含まれているためあつて、文脈から切り離すと筆者の意図が通じなくなってしまうので、念のために補足しておく。この箇所は、複合語の内部境界に異音として前鼻音化子音が発達した経緯について述べた箇所、清濁の対立が音韻化していない状態についての説明である。つまり、濁音の現れる位置（複合語の内部境界にのみ現れる）まで含意して、「世界の諸言語に類例を指摘しがい」と言いたかつたのであつて、「非鼻音／鼻音」という対立自体は、さまざまな言語に例を指摘できるのは当然のことである。

高山氏の批判も、段落全体の主旨からみると、「世界の諸言語に類例を指摘しがい」の部分ではなくて、清濁の対立の起点を「非鼻音／鼻音」という単一の素性の対立に帰す部分に異を唱えているようである。だが、ある音韻の対立を、音声的にはさまざまな相違点があつても、音韻論的には特定の素性の対立として捉えるというのは、音韻論の常套的な手法であろうし、高山氏自身も論文の他の箇所では「この前鼻音こそが清音から濁音を分かつ弁別の特徴だ

つたと考えている」と述べている。筆者としては、高山氏の見解とそれほど異なることを述べたつもりはなかつたのであるけれど、あえて高山氏の考える相違点を想像してみると、清濁の対立がいまだ音韻論的対立となつていない、音声レベルでの変異に過ぎない段階において、その差を「非鼻音／鼻音」の対立という限定的な捉え方をするのが不適切であるということなのであろうか。たしかに音韻史を先取りしてしまつたような表現は不適切である。しかし、そのような意図の批判と読み取るのにも、無理がありそうである。高山氏の意図は、依然として筆者にとつては不明である。

#### 7 連濁の起源についての諸説

以上に述べてきたような、高山氏の拙稿に対する批判は、高山（二〇〇六）では明示的に述べられていないものの、結局のところは、高山氏自身の連濁の起源についての仮説と表裏をなすものである。この機会に、高山氏の説を含めた連濁の起源についての諸説について、過去の拙稿において言及していない事柄を中心に、筆者の見解を述べておくことにする。

連濁の起源についての仮説として、古くからある有力なもの（複数の研究者によって支持が表明されているもの）

としては、同化説・連声濁説の二つがある。

## 7・1 同化説

同化説は、母音に挟まれた無声子音が、前後の母音（有声音）の影響で有声子音に変化したものが連濁であるとするもので、山田（一九〇四）あたりから始まり、日本国内でしばしば採用される説明である。二つの要素が複合した結果、後項の冒頭の清音が「自然に」濁音に変化するという説明は、日本語母語話者の直観にきわめてよく合っている。受け入れられやすい説明なのである。しかし、日本語母語話者の主観から離れて、日本語を客観的に分析しようとするれば、この説明に不自然な部分があることは明らかである（肥爪二〇〇三など）。日本語を母語としない研究者の間では、この同化説は、むしろ不人気であるようである。

複合語の内部境界は、周囲に比べて相対的に明瞭であろうとする位置であると考えられる。「CVCV+VCVCV」のような二音節十二音節からなる複合語に、何らかの音変化が生じる場合、内部境界（C）は、周囲（C・C）よりも（異音の範囲内で）強められた形を取ろうとするか、周囲が調音のゆるみにより変化しようとするのに抗って、そのままの形にとどまろうとするか、どちらかであるのが一般

的であると思われる。前者の例としては、「ねこっかぶり」「ふきっさらし」「おんなつたらし」「すきつばら」のような促音挿入形が、内部境界の子音を強調（延長）した音声形に由来する形式として説明することができる。後者の例としては、いわゆるハ行転呼音が、複合語の内部境界には適用されず、「ちりはひ（塵灰）↓チリハキ」「ゆふひ（夕日）↓ユウヒ」のような現れ方をすることが典型的な例と言えるであろう。「里親」を、意識的に「砂糖屋」から区別して発音しようとするとき、前者の内部境界に完全な声門閉鎖が現れることがあるのは、両者の性質を併せ持った現象と言えようか。

同化説は、調音のゆるみ（同化現象は、一般に調音のコントロールのゆるみであって、単音ごとにもた場合には、常に調音のエネルギーの低下を意味するわけではない）が複合語の内部境界にのみ起こつたとするものである。一方、連濁に関連して、「語頭に濁音が立たない状態においては、『さどとひとさどびと』のような変化によって、『ひと』が『びと』に変化しても、語の区別の上では混乱が生じない」という趣旨の説明がしばしば行われており、これは裏を返せば、「連濁は複合語の内部境界の位置が自明であることを前提とする結合形式である」という原則が存在することを意味する。このような、語構成の不明瞭化を伴わない結合形式である連濁の性質と、複合語の内部境界において

のみ調音のゆるみが起こるとする同化説との間には、大きな溝が存在するのである。

なお、「わが十いも↓わぎも」「なが十いき↓なげき」のような母音脱落・母音融合は、複合語の内部境界のみが、調音のゆるみにより他の音形に変化する現象であり、先の見通しの反例となるように考えられるかもしれない。しかしこれは、母音連接を忌避するという古代語の特徴が、語構成要素の明瞭性を保つことよりも強く働いた結果によるものであって、何ら忌避するものがないにもかかわらず複合語の内部境界が変化する連濁現象とは根本的に異なるのである。

## 7・2 連声濁説

連声濁説の萌芽は、同化説が論文の形で発表されるよりも早かった。すでに Lyman (一八九四) が、「濁音が、有声音の消失した時には例外なく生じていることはあきらかである。この有声音とは大概の場合 n であるが、ノも一般的で、ときには「格助詞の」ニ、またときには否定の n、そしてまたときには他の有声音か音節、たとえば「格助詞の」デの場合もあるようである(屋名池一九九一による)」と述べている。現在の連声濁説は、「やまのかは [jamaŋokapa] ↓やまがは [jamaŋapa]」「ハトのは [kotonopa] →ハトば

[koto<sup>h</sup>ba]」等のように、古代語の濁音が有していた前鼻音の問題と結びつけ、助詞「の」「に」等、鼻音を含む形態素との縮約により、後項冒頭の清音が濁音化したとするものであり、浜田(一九四九)によって本格的に提唱されたものである。古代語には「いにかか√いかか」「はにし√はじ」のような類例があるので、音の組み合わせだけを見れば、まったく無理のない仮説であると言えよう。国語学系の研究者では、高山(一九九二・二〇〇一)により、この説が積極的に再評価され、言語学・英語学系の研究者でも、Ho & Mester(二〇〇三)、Nasukawa(二〇〇五)など、Unger(一九七五)・Vance(一九八二)などの外国人研究者の紹介を経由する形で、この Lyman → 浜田説に言及することが多くなっている。

しかし、この連声濁説が、浜田(一九四九)という、国語史の研究者であるならば誰でも読んでいような著名な論文で提唱されている考え方であるにもかかわらず、長らく黙殺に近い形で放置されてきたのには、それなりの理由があるはずである。端的に言うならば、この説明が、日本語母語話者の直観とかけ離れているということに尽きるのであるが、現代人の直観と合わないからと言って、それが歴史的な意味での連濁の起源として誤った説明であるということにはならない。肥爪(二〇〇二)では、特に連声濁説を強く否定する必要を感じなかったため、「連声濁は本来



的には語構成を不透明化する現象であると考えられる。「」そもそも説明不可能な事例も多い」と簡単に述べただけであったが、その後、言語学・英語学系の研究者の論考において、この連声濁説がしばしば言及されているのを目にし、筆者が連声濁説に賛成できない理由を、もう少し詳しく述べておく必要を感じた。

まず、説明不可能な事例、つまり「の」「に」「で」結びつけることが難しい組み合わせの場合にも連濁が起こることに ついて述べておく。もつとも、連濁現象を説明する際に、「類推」という説明装置を使用せずに済みますことが不可能である以上、「の」「に」「で」関係づけられる組み合わせにおいて、連濁現象がまず発達し、後に「類推」により、それ以外の組み合わせの場合にも拡張していった、という説明を否定するのが困難であることは認めなければならぬ。しかし、都合の悪い事例をすべて「類推」で片付けて良いのであつたら、どんな仮説でも成立してしまうことになるのもまた事実である。「類推」によつて説明するのは、あくまで個別のな語例にとどめ、連濁現象のパターンとして類型化できるほどの大きなグループにまでは、そうした説明を及ぼさないのが望ましいであろう。

本稿では、連声濁説では説明できない組み合わせ事例として、「接辞・付属語が関与する連濁」に限定して、問題を指摘することにする。

言うまでもなく、「の」「に」等の助詞によつて連結することができるのは、ある程度自立性を持った単位同士である。しかし、古代語においては、「接頭語」と分類されているものでも連濁を起す例は多いし、濁音で始まる「接尾語」も多く指摘できる。それらの事例のうちのいくらかは、語源的には自立性を持つていた、あるいは、何らかの鼻音要素の縮約を経た形であると説明することが可能かもしれない。しかし、「連濁が起こるのは複合語(自立語+自立語)のみであつて、派生語(接頭語+自立語、自立語+接尾語)では連濁が起こらないのが、連濁本来のあり方であつた」とまで推断することが、本当に可能なのであろうか。

一方、助詞の連続においても連濁が起こることがあると、一般には考えられていることも指摘しておく。誰でも思いつく例は、万葉集冒頭歌の「我許背齒」を「我こそば」と読む例で、これは係助詞「こそ」「は」が連濁を起こしたものと説明されている。万葉集冒頭歌の表記からは、「は」の清濁は確定できないが、古事記歌謡や他の万葉集歌において「許曾婆(神代記)」「己曾婆(万叶)」等のごとく、濁音仮名が用いられることがあることから、万葉集冒頭歌の例も「こそば」と濁つて読むことが多いのである。古代語の清濁を知るための、最も古いまとまった資料である『古事記』において、助詞の連続が連濁を起こしていることを、「類推」による副次的なものと処理してしまうのは、やはり躊躇い

を感じざるをえない（「こそば」が、係助詞「こそ」「は」の結合に由来するものではない可能性も残されるのではあるけれども）。

次に、「語構成の不透明化」の問題である。「なにとVな」ど「はにしVはじ」のような連声濁は、語構成意識のゆるみを前提とする現象であることは言うまでもない。連濁が連声濁の一種であると仮定すると、「の」「に」などの「後置」的性格を持つ助詞が、従属先の前項とではなく、（文節境界を越えて）後項と融合するという、融合方向の不自然さが問題となってくる。例えば、「やまのかは」が「やまがは」に変化したとすると、「のか」が融合して「が」となった、つまり助詞「の」は後項の側に融合したことになる。

このようなタイプの融合は、語構成意識がゆるんで、語源が意識されなくなったときにのみ起こるのではないだろうか。たとえば、「ことのはVことば」のような変化の場合ならば（も）、それが起こったとしても不自然だとは考えない。

「ことば」の場合は、もはや「こと（言）」と「は（端）」には還元され得ない、つまり語構成が不透明化しているの  
で、「の」が後項に融合しているとしても不自然ではないからである。しかし、連濁形一般は、特別な語源知識を持つていなくても、いつでも構成要素が何であるかを想起することが可能な形式であるのが原則である。連声濁説が仮定する融合の仕方と、連濁形が持っている性質との間には、

大きな隔たりが存在すると言わざるをえない。

カードの裏表のように自在に反転する、日本語の特徴的な清濁関係は、主に連濁現象によって支えられている。そのような関係が形成されていない状態において、「やまのかはVやまがは」のような融合によって連濁形が発達したとすると、「やまがは」は、なぜ「やま」と「かは」に容易に還元することができるのであろうか。（和語の）形態素頭の清濁は意味の区別に関与しない（「かは」でも「がは」でも意味の区別には影響しない）という関係は、いかなるきっかけで発達したことになるのであろうか。

もともと、「やまのかは」の「の」が前項の側に融合する、つまり [jamakapa ~ jamakapa] の内部境界の鼻音要素が、連濁現象の発達時においては、音韻論的に、前項の側に所属していたと主張するのならばまだ理解しやすい。しかしながら、その場合は、この鼻音要素が、国語史のどこかの段階（おそらく上代語より前の段階）で、何らかの事情により、後続の子音の側に、音韻論的に移動したと説明することになる。連濁形の場合、この鼻音要素の移動は、語構成の明瞭性を損ねることのないまま、意味の切れ目を飛び越えて起こったことになろう。そして、この路線で合理的なストーリーを描くためには、連濁現象の発達時において、あらかじめ清濁の音韻論的対立が存在したのか否か、存在した場合には前鼻音を伴っていたのか否か、という点を棚

上げしたままでは済まなくなるはずである。現在のところ、  
そこまで踏み込んだ連声濁説は提出されていない。

## 8 柳田説について

なお、高山氏も言及しているとおり、濁音が持つ前鼻音の起源については、筆者とも異なる解釈が、柳田（二〇〇二）によって提出されている。この機会に、柳田氏の解釈に対する筆者の見解を述べておくことにする。なお、柳田氏の濁音の前の鼻音要素を「鼻母音」と表現しているが、本稿では、これを濁子音の側に所属する「前鼻音」と読み換えて検討することにする。それに合わせて、柳田氏の解釈の細部を修正して受容することになったため、以下に展開する批判は、柳田氏のオリジナルの解釈には当て嵌まらない部分があることを、最初にお断りしておく。

【仮説】清濁の対立は、古くは「無声／有聲」の子音の対立であった（濁子音は前鼻音を伴っていないかった）。そこに、「なにとゝなど」「かぬち（金打）ゝかち（鍛冶）」のような「上代に起きていた広義の音便」によって、前鼻音を伴う濁子音が広範囲に発達し、それが既存の濁子音に波及して、濁子音一般が前鼻音を伴うようになった。

柳田氏の意図の細部に関しては、論文からは読み取りかねる部分が残されるのであるが、とりあえず、この仮説における濁子音音価の合流方向が不自然であるということは言えるであろう。

一般に、ある音素の連続が、ぞんざいに発音されて音的に標準から外れる形を取ったとしても、それがその言語の他の音素連続（または単独の音素）と同定されないうちは、音韻論的には、もとの音素連続のままであり、それが音声レベルで不完全な実現をしているのみと解釈されよう。そして、他の音素連続と同定されれば、ただちに、その既存の音素連続の磁場に取り込まれ、音声的にも、その既存の音素連続の標準的な形で実現するようになるのが普通であろう。たとえば、「そんなこといつてはいけない」の *newa* 「テワ」は、融合して *ɕjaɪ* 「チャー」（*ɕjaɪ* 「チャ」）に変化した。が、「テワ」と「チャー」は、音声的に、かなり隔たりがある。その中間的な音声、たとえば *[teɪ]* *[tʃaɪ]* などが、「テワ」を意図したぞんざいな発音において実現したとしても、それらは、音韻論的には *newa* であると解釈される。そして、ぞんざいな発音が既存の音素連続 *[jaɪ]* *[tʃaɪ]* と同定されれば、ただちに、「そんなこといつてはいけない」のごとく実現するようになるのであって、既存の音素連続 *[ɕjaɪ]* の音声的な実現が *[teɪ]* *[tʃaɪ]* の側に引

き寄せられるということは考えにくい。よほど特殊な条件が働かないかぎり、そのような変化は起こらないであろう。

既存の濁子音が前鼻音を伴わず、かつ、撥音が音韻として確立されていない状態であるならば、「かぬち√かぢ」のような変化の過程で、「[ka] [kan]」のような音声が見れ得たとしても、それは非音便形 /kan/ の不完全な実現にすぎず、「[kati] [ka<sup>h</sup>ti]」のような音声がある、/ka + ti/ の音節連続と同等であれば、ただちにその音素連続の磁場に取り込まれ、鼻音要素が消失するのが通常のあり方であろう。つまり、変化が起こったあとの濁子音が前鼻音を伴っているのであるならば、変化が起こる前から濁子音一般が前鼻音を伴っていたと考える方が自然なのである。もし、音節の融合によって生じた「前鼻音を伴う濁子音」が、既存の「前鼻音を伴わない濁子音」を音声的に引き寄せたと主張するならば、なぜ、そのような不自然な合流の仕方をしたのかという説明も併せて提出しなければならぬであろう。

ただし、前鼻音を伴う濁音と前鼻音を伴わない濁音とが、いったん音韻論的に対立し、清音とあわせて三項対立が形成されていたというならば、その後（上代語の段階までに）、濁音が前鼻音を伴うものに統合されたとしても、合流方向が不自然ということになる。可能性としては残されるものの、柳田氏は、こうした解釈を採用していないし、新たに説明すべき事が増えるだけであるから、筆

者も採用する予定はない。

さらに付言すると、柳田音韻史においては、ア行の衣 [e] とヤ行の江 [e] が、いったん [e] に合流したのち、[e] へと変化したとする、橋本進吉以来の通説が不自然であることが、きわめて強く主張されているのであるから、例えばダ行子音において、「[d] がいったん [d<sup>h</sup>] に変化したのち、現代に至るまでに [d] へと戻ったという「不自然な」仮説を、十分な説明もなく提出しているのは、納得しにくいところである。

## 9 最後に

問題の性質上、連濁の起源についての議論に最終決着がつくことは、まずないのである。しかし、清濁の対立のあり方の問題は、日本語にとってきわめて大きな問題であり、解決不可能だからといって、この対立関係のあり方の起源についての思弁を進めずに放置しておけば、日本語の音韻研究の清濁に関する部分は、きわめて皮相な分析に終始することになってしまおうであろう。現時点では、連濁の起源についての仮説も出そろっているとは言えない段階である以上、連濁の起源には、どのような可能性があつて、それだけの仮説にどのような長所・短所があるのかを整理することが、当面の課題なのだと考える。

[注]

(1) 一般に、連濁形は非連濁形よりも結合度が高いとされてくるが、連濁形は、あくまで、もとの要素に還元することが容易である(2)を原則とする結合形式である(やまはなとやまはなと)。一方、非連濁形の中には、「かた十ち(形)」「し十か(鹿)」「う十く、独立性の弱い接尾語・接頭語が関与しているものもあり、「あか十き」「しろ十く」のように、連濁を起さなかった一方で、のちにイ音便・ウ音便を起すような組み合わせもある。

(2) 肥爪(二〇〇三)においては、二つの方法しか挙げられていないが、その後、他にも多様な方法があり得ると考え直したため、肥爪(二〇〇四)では曖昧な表現に後退することになった。

(3) Nasukawa (二〇〇五)では、日本語における濁子音の前鼻音化を、弱化 lenition によると説明する点が、筆者の仮説とは正反対であるが、これは、連濁に関わらない濁音(語中の前鼻音化した濁音)を、連濁によって生じる濁音に先行して存在するものとして説明しようとした結果である。

(4) 「じとじ」は「じとじ」の連濁形と説明されることもある。文献上は、「じとじ」の方が新しい形であるからである。今、仮に一例としてあげるのである。

参考文献

Benthall, John E. & Bankson, Nicholas W. (二〇〇一)『構音と音韻の障害』(船山美奈子・岡崎恵子監訳)協同医書出版(原著の

四版(一九九八)の日本語訳)

Clark, Eve V. & Bowerman, Melissa (一九八六) On the acquisition of final voiced stops. In J. A. Fishman, A. Tabouret-Keller, M. Clyne, Bh. Krishnamurti, & M. Abdulaziz (Eds.), *The Fergusonian impact*, Vol. I: From phonology to society (pp. 51-68).

Fey, M. E. & Gandour, J. (一九八二) Rule discovery in phonological acquisition. *Journal of Child Language*, 9, 71-81.

Grierson, George. (一九二二) Spontaneous nasalization in the Indo-Aryan language. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain*, 381-388.

Ito, Junko & Mester, Armin (二〇〇三) Japanese Morphophonemics, Markedness and Word Structure.

Lyman, Benjamin Smith. (一九九四) The Change from Surd to Sonant in Japanese Compounds. *Oriental Studies*. (鹿谷池一九九一に482)

Nasukawa, Kuniya (二〇〇五) A Unified Approach to Nasality and Voicing. *Mouton*.

Ohara, John J. (一九八二) The Phonological End Justifies Any Means. S. Hattori & K. Inoue (eds.), *Proceeding of the XIIIth International Congress of Linguistics*. (三編制) 232 - 243

Ohara, John J. & Ohara, Manjari (一九九三) The Phonetics of Nasal Phonology: Theorems and Data. *Phonetics and Phonology*, Volume 5, Nasals, Nasalization, and the Velum.

Unger, James Marshall (一九二五) Studies in early Japanese morphophonemics. Doctoral dissertation, Yale University.

Vance, Timothy J. (一九八二) On the origin of voicing alternation in

Japanese consonants. Journal of the American Oriental Society.

102

亀井 孝(一九五〇)「硬縮涼鼓集を中心に見た四つがな」『国語学』

四)、『日本語のすがたとこころ』(一) 亀井孝論文集3』(一九八五 吉川弘文館)による。

荻安 誠(二〇〇二)『音声障害』(言語聴覚療法シリーズ 一七) 建帛社

川上 泰(一九九〇)「昔の清音、濁音」『国語研究』五)

国立国語研究所(一九九〇)『日本語の母音、子音、音節 調音運動の実験音声学的研究』

高山知明(一九九三)「破擦音と摩擦音の合流と濁子音の変化——い  
わゆる『四つ仮名』合流の歴史的位置づけ——」『国語国

文』六二四

高山倫明(一九九二)「連濁と連声濁」『訓点語と訓点資料』六)

高山倫明(二〇〇二)「連濁の音声学的蓋然性」『筑紫語学論叢』風  
間書房)

高山倫明(二〇〇六)「四つ仮名と前鼻音」『筑紫語学論叢Ⅱ』風間  
書房)

竹内和弘・福田登美子他(二〇〇二)『口蓋裂・構音障害』(アドバ

ンスシリーズ・コミュニケーション障害の臨床6) 協同医  
書出版社

濱田 敦(一九四九)「促音と撥音」『人文研究』二二)、『国語史  
の諸問題』(一九八六 和泉書院)による。

早田輝洋(一九七七)「生成アクセント論」(岩波講座日本語5音韻)

肥爪周二(二〇〇二)「ハ行子音をめぐる四種の『有声化』」『茨城  
大学人文学部紀要 人文学科論集』三三)

肥爪周二(二〇〇三)「清濁分化と促音・撥音」『国語学』三三)

肥爪周二(二〇〇四)「結合標示と内部構造標示」『音声研究』八二)

屋名池誠(一九九二)「ライマン氏の連濁論」(原論文とその著者に  
ついて 付・連濁論原論文『日本語の連濁』全訳)、『百舌

鳥国文』一一)

柳田征司(二〇〇二)「濁音の前の鼻母音——その成立・衰退と音便  
——」『国語と国文学』七九ノ一一)

山口佳紀(一九八八)「古代語の複合語に関する一考察——連濁をめ  
ぐって——」『日本語学』七五)

山田孝雄(一九〇四)「連濁音の発生」『國學院雑誌』一〇八)

(ひづめ しゅうじ) 人文社会系研究科 助教授)